

## 『転換期の日本へ』

2014年10月20日

ジョン・W・ダワーとガバン・マコーマックの『転換期の日本へ』が今年の1月に上梓された。それぞれの論文と二人の対話の三部構成になっている。ジョン・W・ダワーの専門は近代日本史で、『敗北を抱きしめて 第二次大戦後の日本人』を著している。外国人から見た日本が描かれ、なるほどと納得させられた。ガバン・マコーマックはオーストラリア国立大学名誉教授で、専門は東アジア現代史である。『転換期の日本へ』では、ガバン・マコーマックの齒に衣着せぬ論述と沖縄への愛に惹かれた。

マコーマックは一貫して、日本は米国の「属国」であると主張している。サンフランシスコ講和条約によって、戦後の日本は国際社会に船出した。以後、サンフランシスコ体制が日本の針路を決定づけた。講和条約調印式後、吉田茂元首相一人で「陸軍、空軍及び海軍を日本国内及びその付近に配備する権利」を認める「日米安全保障条約」に調印した。トルーマン大統領の特使ダレスは、来日して「我々は日本に、我々が望むだけの軍隊を望む場所に望む期間だけ駐留させる権利を獲得できるであろうか？これが根本問題である」と要求した。ダレスの要求は満たされ、米軍駐留はいまだに続いている。

マッカーサーの主張により、憲法で「象徴」となった天皇は米軍駐留を維持する米国の後押しをした。「アングロサクソンの代表者である米国がそのイニシアチブを執ることを要する」ので「25年から50年、あるいはそれ以上にわたる長期の貸与というフィクション」のもとで、沖縄の米軍占領を要請した。沖縄は昭和天皇によって売られた訳である。

マコーマックは下記のように分析している。講和条約と安保条約によって、日本は独立国とは名ばかりで、実質的には独自の外交も防衛も許されず、経済や社会政策決定の権限も限られた「信託統治」領であった。殊に沖縄は「太平洋の要石」として軍事占領され続けてきた。米国は世界の150ヶ国、大小合わせて1,000の基地を持っているが、日米の軍事協定ほど、地位協定、思いやり予算等々、不平等なものはない。その通りではないか。

孫崎亨は『戦後史の正体』で、戦後政治を対米追従派と自立路線派のせめぎ合いという視点から、自立路線派はワシントンの圧力で排斥され、追従派が優勢になっていったと説明している。マコーマックは、軍事同盟は「極東」の範囲を超え、世界的な枠組へと格上げされ、米国追従は一層深まったと分析している。

鳩山由紀夫元首相は東アジア共同体を構想し、米国の市場中心の経済政策に距離を置く、官僚主導から政治を取り戻す、普天間基地は「最低でも県外」へ移転すると言った。米国から前例のない非難と恫喝を浴び、対米追従にのめり込んでいた政府高官たちは鳩山元首相ではなく米国政府に忠誠心を向けた。無責任なメディアも追い詰め、辞任せざるを得なくなった。小野寺元防衛大臣から「国賊」とまで言われている。

この「属国根性」は沖縄を全く無視してきた。マコーマックは、沖縄を冷戦期の米国の戦略から近隣諸国の「架け橋」になるように「周辺」から「中心」に押し出すべきであると言い、沖縄県民の闘いについて下記のように書いている。「現代日本には、沖縄のように県民が結束して『ノー』を突きつけた前例はない。地元の意思を無視し、日本政府の合意だからと、新たな軍事基地建設を押しつけようとする動きを、県民は1996年いらい拒否し続けてきた。民主的憲法の原則を大切にするより、米国の軍事的、経済的戦略を最優先させる政府に対する沖縄県民の抵抗は実に根深く、したたかなものである。」本土が沖縄化しなければ、属国からの脱却はできないのではないか。